

■原采蘋 漢詩人。幕末の動乱期にあって、生涯の大半を遊歴の中に過ごし、女流三傑の一人と謳われた。

はらさいひん

古事記伝・・1798＝ 筑前国秋月で、藩の儒者で藩学稽古館の教授でもあった原古処の長女に生まれる。名は猷，別号を霞窓。

幼時から拔きんでた才の持主で、兄と弟がともに病弱だったため、父から溺愛されつつ教育されて育ち、詩文をよくし書もまた能筆で、少女時代には父と一緒に各地を周遊、各地の文人墨客と交わる機会も得る。

ワヅ船狼藉・ 1807＝ 9歳：

伊能測量終・ 1816＝18歳：

水野忠成老中1818＝20歳：

異国船打払令1825＝27歳：_父の’不許無名入故城(名無くして故郷に入るを許さず)’という詩に送られ、久留米藩士の養女という形で京に上る。

日本外史・・1827＝29歳：*滞京中に父重病の知らせを受け、帰省しその看病に当たるも、父が死去してしまうと、遺命を果たすべく、男装帯刀で一人東遊し、頼杏坪・山陽・菅茶山・梁川星巖らと応酬、詩名は大いに上がる。

シボム事件・ 1828＝30歳：

恋愛の経験はあったが、独身を通し、

高島砲術・・1834＝36歳：この頃、*江戸に出て浅草で私塾を開く。

大塩平八郎乱1837＝39歳：

江戸滞在の間、二度にわたって母の江戸招請を藩に願い出るも、許可されず、

順天堂始・・1843＝45歳：

阿部正弘首座1845＝47歳：

・・・・・1847＝49歳：南安房方面に遊び、その地の文化人と交友。

・・・・・1848＝50歳：*母の病を聞き、13年におよぶ江戸暮らしをたたんで帰郷、母と筑前山家に移り住み、私塾を開く。

_母の死去後、肥前・肥後・薩摩へ遊歴の旅に出、

万次郎帰国・ 1852＝54歳：

ペリー来航・ 1853＝55歳：

_この間、“学文先生”と尊称されるようになり、多くの門弟を育てたが、

安政の大獄・ 1859＝61歳：山家の住居をひきはらい、*宿願である父原古処の遺稿を刊行する目的でまた旅に出、出版のための資金作りをしながら長州の萩に着いたところで、病に倒れ、没した。

死に臨んで長州藩の勤王家土屋蕭海に悲願を託すも、安政の大獄の動乱で古処詩集の出版は成らず。代表作は「東遊漫筆」「采蹟詩集」など。

「日本の女性」、インターネット「ちくしの散歩」ほか、